

そう だい  
総 題 「マルコによる福音書」

だいりっ か ひと ほんしやう で  
第6課 人の本性から出てくるもの

めい ち しんさく  
明智信作

いち あんそくにち ご  
1. 安息日午後

こんしゅう ひと ほんしやう で  
今週のテーマは「人の本性から出てくるもの」です。それが、人をけがすのであって、外から人の体にはい  
るものではない、ということを学びます。暗唱聖句は、ずばり、このことを明確に教えてくれています。

に にちようび にんげん い つた かみ めいれい  
2. 日曜日：人間の言い伝えと神の命令

イエスの時代には、神の命令よりも、人間の言い伝えの方を大切にしていました。その結果、弟子たちが洗わ  
ない手でパンを食べているのを見て、ファリサイ人や律法学者たちが、弟子たちのしたことをイエスに尋ねたとき、  
イエスは『この民は、口でわたしに近づき／唇でわたしを敬うが／心はわたしから遠く離れている。彼らが  
わたしを畏れ敬うとしても、それは人間の戒めを覚え込んだからだ』（イザヤ 29：13）と、神の命令  
の代わりに人間の言い伝えを大事にする事をまちがいだと言って、弟子たちを守りました。



さらに、イエスは「父と母を敬え」という神の命令をとりあげ、『もし、だれかが  
父または母に対して、「あなたに差し上げるべきものは、何でもコルバン、つまり神へ  
の供え物です」と言えば、その人はもはや父または母に対して何もしないで済むのだ』  
と。こうして、あなたたちは、受け継いだ言い伝えで神の言葉を無にしている。』（マル  
コ7：11～13）と、人間の言い伝えが間違っていることを示し、人間の言い伝  
えよりも律法の戒めを守るようハッキリと言っておられます。

さん げつようび て こころ  
3. 月曜日：きれいな手か、きれいな心か

イエスは、「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、  
人を汚すのである」（マルコ7：15）と群衆にお語りになりました。

この言葉は、レビ記11章の、清い食べ物と汚れた食べ物に関する教えを廃止しようとしておられるのでは  
なく、ファリサイ派の人々が作った接触の汚れの言い伝えが無効であるということです。例えば、「異邦人と一  
緒にいて汚れるのであれば、異邦人が触れた食べ物に触れることでも汚れる」というような考えはまちが  
っている、ということです。



「人から出て来るものこそ、人を汚す。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、食欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」(マルコ 7 : 20 - 23)

この聖句で、イエスが言われた「人を汚す」ものとは、「人から出て来るもの」、つまり、人間の「悪い思い」から出てくるものであると教え、具体的に「淫らな行い、盗み・・・無分別など」を示しておられます。さらに、イエスは、十戒の第5条の「父と母を敬え」(マルコ 7 : 10)の戒めを無視した「何でもコルバンで父または母に対して何もしないで済む」という言い伝え(マルコ 7 : 11 ~ 13)や、口先だけの礼拝は、十戒の第1条から第4条を破る事になるのだと教え、神の律法を正しいと言っておられます。

#### 4. 火曜日：犬のためのパン屑

イエスがツロの地方に行かれた時、「だれにも知られないように、家の中にはいられたが、隠れていることができなかった」(マルコ 7 : 24、口語訳)とあります。

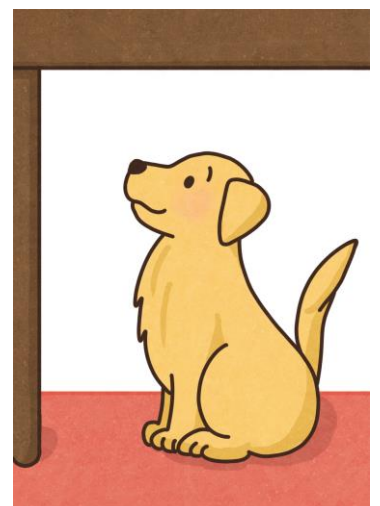
このみ言葉が示しているように、当時、イエスは、どこに行かれても人々の関心を集めていたこと、そして、人々は、居場所を聞きつけると、すぐにイエスのもとにやってくるということがわかります。

マルコ 7 : 24 - 30 に出てくる、ギリシャ人女性もその一人でした、ギリシャ人女性は、自分の娘がけがれた霊につかれている、という大きな重荷をかかえていた女性でした。娘もどんなにか苦しい思いをしていたに違いありません。ギリシャ人女性は、「イエスのことをすぐ聞きつけてきて、その足もとにひれ伏し」(マルコ 7 : 25、口語訳)、「娘から悪霊を追い出してください」(26節)とお願ひしました(新改訳では「願ひ続けた」)。

ところがイエスは、「まず子供たちに十分食べさせなければならぬ。子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」(マルコ 7 : 27)とお答えになります。一見、断っているかのような印象を受けますが、そうではありませんでした。イエスは、「まず」と述べて「次」があることを感じさせ、さらにギリシャ人女性が食卓の下にいてパン屑をいただくように、ギリシャ人女性もイエスの足もとで娘のために一生懸命に願ひして、イエスの娘をいやすという力強い奇跡を「パン屑」として信仰を表しています。

イエスの「子供たちのパンを取って子犬にやってはいけない」と言うお答えに対して、ギリシャ人女性は、「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供たちのパン屑は、いただきます」(マルコ 7 : 28)とこたえました。これは犬が家の食卓の下にいてパン屑をいただくように、ギリシャ人女性もイエスの足もとで娘のために一生懸命に願ひして、イエスの娘をいやすという力強い奇跡を「パン屑」として信仰を表しています。

イエスは、切実な気持ちで、しかも、ご自分を信じて身元に来る者を、決してがっかりした気持ちで帰すようなことはなさらない、憐れみ深いお方だと、あらため



かん ばめん どうじ ははおや しんこう むすめ おも あい ころ う  
て感じさせる場面です。と同時に、この母親の信仰と娘を思うひたむきな愛にも心を打たれます。

## 5. 水曜日：回らない舌

みみ き はな こんなん おとこ つ こ みみ き はな まわ ひと  
耳が聞こえず、話すことも困難な男が連れて来られました。耳が聞こえず話すこともできないと周りの人とコミュニケーションが取れなくて孤独になり苦しむことを、イエスは理解して、ひそかに男を連れ出され、男の両耳に指を差し入れ、唾をその舌に触れ、深くため息をつかれました。ため息をつかれたのは、「真理に向かって開こうとしない耳と、あがない主を告白しようとしないう舌を思つて」『希望への光』8 8 1 ページ、『各時代の希望』第4章)でした。

にんげん じゆういし そんちよう にんげん いし むし おこな こと  
イエスは人間の自由意志を尊重するので、人間の意志を無視してまで、みわざを行う事はしません。イエスはみみ き ひと みみ ひら ふしんこう ひと ころ じぶん みと  
耳の聞こえない人の耳を開くことはできても、不信仰の人の心にご自分がメシアであると認めさせることはできません。

で おとこ よろこ かみ た かえ ひと かみ なに しめ どく  
しかし、ここに出てくる男のいやしは、喜んで神に立ち帰る人に神が何をおできになるかを示しています。読  
しゃ みな なか ちょうかく しょうがい ひと しゅ まね みちび じぶん おうとう こと  
者の皆さんの中には、聴覚に障害がある人もおられますが、主のお招きとお導きにご自分から応答(応えて)  
して、キリストをご自分の救い主と信じる信仰を神からいただいた方々です。聴覚に障害がある方々は、神  
の御声を聴く事ができるようにならせいただいたことを神に感謝し、御名をほめたたえましょう。生きた証しになります。

## 6. 木曜日：悪いパンに注意なさい

はち じゅういち は ひとびと き ため てん もと ぎろん  
マルコ8：11には、「ファリサイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、天からのしるしを求め、議論  
かけた」とあります。このみ言葉によれば、ファリサイ派の人々は、イエスを試し、天からのしるしを求め、議論  
をすることだけに関心があつて、はじめから、求道心などなく、イエスを信じる心など持っていない事がわかり  
ます。ガイドが指摘しているように、「たとえそれが天からのしるしであっても、彼らを納得させることはできない  
でしょう。それは、これまでのすべてのことと同様、はねつけられるだけです。どんな奇跡も、信じまいと心に決  
めている人を納得させることはできないのです。」(ガイドp 44)

かれ なか かみ もと ころ ふか しつぼう  
イエスは、彼らの中に神を求める心がなかったので、深く失望されました。

で し も わす  
弟子たちはパンを持ってくるのを忘れていました。

きかい もち は だね はち じゅうご  
イエスはこの機会を用いて、ファリサイ派とヘロデの「パン種」(マルコ8：15)、  
つまりファリサイ派と\*ヘロデ派の教えに気をつけなさいと、弟子たちに警告されまし  
た。



で し じぶんたち わす き おも はな りかい  
しかし、弟子たちは、自分達が忘れて来たパンのことと思い、イエスの話そうとしておられることを理解できま  
せんでした。イエスは、弟子たちがご自分の話を理解していないことに失望しながらも、弟子たちを霊的に目覚め

させるために、<sup>はなし つづ</sup>話を続けられました。

「なぜ、パン<sup>もち</sup>を持っていないことで議論<sup>ぎろん</sup>するのか。まだ、分<sup>わ</sup>からないのか。悟<sup>さと</sup>らないのか。心<sup>こころ</sup>が力<sup>ちから</sup>なくなっているのか。目<sup>め</sup>があっても見<sup>み</sup>えないのか。耳<sup>みみ</sup>があっても聞<sup>き</sup>こえないのか。覚<sup>おぼ</sup>えていないのか。・・・まだ悟<sup>さと</sup>らないのか」(マルコ<sup>はち</sup>8:17、18、21)

イエスは、マルコ<sup>はち</sup>8:19、20で、5000人<sup>ご せ ん にん</sup>(マルコ<sup>ろく</sup>6:30-44)と4000人<sup>よん せ ん にん</sup>(マルコ<sup>はち</sup>8:1-10)の人々を養<sup>やしな</sup>われたあと、パンくず<sup>はい かご</sup>の入った籠<sup>かご</sup>がいくつあったかと、質問<sup>しつもん</sup>することで、弟子<sup>でし</sup>たちに少<sup>すく</sup>ないパン屑<sup>くず</sup>を増<sup>ふ</sup>やせたことを思いだ<sup>おも</sup>させようと思いました。

ファリサイ派<sup>は ひとびと</sup>の人々やヘロデ派<sup>は しん</sup>は、信<sup>しん</sup>じまいと心<sup>こころ</sup>に決<sup>き</sup>めているので、神<sup>かみ</sup>なるイエスでも、ファリサイ派<sup>は ひとびと</sup>の人々やヘロデ派<sup>は なつとく</sup>を納<sup>こと</sup>得<sup>とく</sup>させる事<sup>こと</sup>はできません。しかしイエスに信<sup>しん</sup>じてつ<sup>く</sup>いて来<sup>でし</sup>る弟子<sup>りかい</sup>たちがな<sup>すがた</sup>かなか理<sup>み</sup>解<sup>とき</sup>できない姿<sup>すがた</sup>を見<sup>み</sup>る時<sup>とき</sup>、イエスさまがどれ<sup>にんたい</sup>ほど忍<sup>ま</sup>耐<sup>き</sup>して待<sup>まち</sup>っていてくださるか、とあらためて気<sup>き</sup>づかされます。



※ヘロデ派<sup>は しゅうきやうてき</sup>:宗<sup>しゅう</sup>教<sup>きやう</sup>的<sup>てき</sup>なグルー<sup>ぐ</sup>ープ<sup>うぷ</sup>ではなく、ヘロデ<sup>せいじてき</sup>をはじめとする政治<sup>せい</sup>的<sup>てき</sup>な一<sup>いつ</sup>派<sup>ぱ</sup>です。ローマ<sup>た</sup>によって立<sup>た</sup>てられたヘロデ<sup>おうけ</sup>王家<sup>しじ</sup>を支持<sup>ひと</sup>する人<sup>ほんらい</sup>たちです。本来<sup>は</sup>、ファリサイ派<sup>は</sup>とヘロデ派<sup>は</sup>は仲<sup>なか</sup>良<sup>よ</sup>くありませ<sup>な</sup>んでしたが、イエス<sup>さま</sup>様<sup>おとし</sup>を 陷<sup>おとし</sup>れようとする時<sup>とき</sup>には手<sup>て</sup>を組<sup>く</sup>みました。

## 7. 金曜日 <sup>なな きんようび</sup>さらなる研究<sup>けんきゅう</sup>

参<sup>さん</sup>考<sup>こう</sup>資<sup>し</sup>料<sup>りょう</sup>として紹<sup>しょう</sup>介<sup>かい</sup>されてい<sup>い</sup>る『各<sup>かく</sup>時<sup>じ</sup>代<sup>だい</sup>の希<sup>き</sup>望<sup>ぼう</sup>』第<sup>だい</sup>4第<sup>だい</sup>2章<sup>しょう</sup>「言<sup>い</sup>い伝<sup>つた</sup>え」、第<sup>だい</sup>4第<sup>だい</sup>3章<sup>しょう</sup>「打<sup>だ</sup>破<sup>は</sup>され<sup>は</sup>た壁<sup>かべ</sup>」、第<sup>だい</sup>4第<sup>だい</sup>4章<sup>しょう</sup>「真<sup>ま</sup>のしるし」を讀<sup>よ</sup>みましょう。証<sup>あかし</sup>の書<sup>しょ</sup>は、この教<sup>きやう</sup>会<sup>かい</sup>に与<sup>あた</sup>えられてい<sup>い</sup>るすばらしい光<sup>ひかり</sup>です。